



しらさぎ

求めて学ぶ 考えて行う 自ら鍛える

目黒区立第八中学校
学校だより NO. 5
(通巻164号)
平成30年(2018)
5月30日(水)

『成長を感じた 修学旅行』

校長 飯野 博史

6月2日(土)の運動会が近づきました。天気予報では晴れ、生徒たちの活躍をぜひご覧ください。よろしくお願いいたします。

24日(木)～26日(土)、修学旅行が無事終了しました。3日間とも天候に恵まれ、初夏の奈良・京都を楽しみました。修学旅行シーズンでもあり、どの見学場所も大変な混雑でした。30度の暑さの中、生徒たちは整然と行動することができました。

1日目、京都駅からバスで平等院へ向かいました。教科書で見る鳳凰堂を間近で見ることができ、驚きの声が上がりました。平等院から奈良へ向かい、法隆寺、中宮寺を見学しました。中宮寺では全員が菩薩半跏像の前に正座し、解説を聞きながら鑑賞しました。

2日目は奈良の宿舎から、大仏殿などを見学しながら班毎に京都へ向かいました。大仏の大きさに驚いていた生徒がたくさんいました。鹿せんべいを持って、鹿に追いかけられている生徒もいました。二月堂から夜景を眺めたり、早朝の若草山を散策したり、京都では川床料理を堪能したりなど、初夏の古都の風情を味わいました。

3日目は早朝、宿舎近くの神護寺へ行き「かわらけ投げ」を体験しました。宿舎からタクシー班行動で京都市内を見学しました。タクシーの運転手さんが京都の寺社について詳しく説明してくれました。最初はやや緊張していた生徒たちでしたが、集合場所の京都駅へ来る頃にはすっかり運転手さんと親しくなっていました。

修学旅行中、感心したことがいくつかあります。一つは、男女の仲が大変よく協力し合って行動していたことです。課題もいくつかありましたが、今までの校外学習で学んできたことが活かされていたことを感じました。大変な混雑の中、私の姿を見つけて遠くから手を振ってくれる班もありました。穏やかな姿に成長を感じました。

班長を中心に、自分の係の仕事に責任を果たす姿もうかがえました。食事は毎回大広間でとりましたが、みんなが揃えて脱いでいったスリッパをさらにきちんと真っ直ぐに並べる生徒がいました。先生に言われてやるのではなく、自分から進んで黙々と取り組む姿に感心しました。3年生の成長を感じた二泊三日でした。

さあ今度は運動会、修学旅行直後ですが最上級生として全校をリードしていってくれることを期待しています。



奈良公園



大仏殿



神護寺

5月30日 開校記念日
美しくも哀しい『しらさぎの伝説』



目黒区立第八中学校校歌

佐藤春夫 作詞

大中寅二 作曲

君は聞かずやむさし野の
碑^{ひがすま}衾あたり伝えいう
信義に生きし白鷺の
形見と咲ける野の花ぞ
今わが校の記章^{しるし}なる
君は見ざるや目黒区の
竹より直く学ぶ子は
正義と真理愛しつつ
命の華を生ききそい
みな勤^{いそしみ}労に楽しむを

5月30日は開校記念日です。本校は昭和22年に開校しましたので、今年で開校71年目を迎えます。開校記念日にちなんで、本校の校歌と校章の由来についてご紹介します。第六代大脇憲三校長先生（故人、昭和38年4月～昭和45年3月まで在職）のお話を当時のPTA広報担当の方が聞き取ったものです。（毎年掲載しています）

我が八中の校歌の歌詞、又校章にデザインされた「さぎ草」の由来を、皆様ご存じでしょうか。

さぎ草は高さ15～20センチメートルの多年草の湿地ランの一種で、世田谷区の花に指定されています。昔、碑衾村と言われた八中所在地あたりから、世田谷区奥沢鷺の谷にかけて、田圃のあぜ道にやさしい白い花を咲かせていたと言われております。

この小さな花には次のような悲しく、美しい話が伝えられています。

今から650年程前の室町時代のことです。世田ヶ谷城主の吉良氏が住んでいました。

この城主の奥方は、奥沢城主大平氏の娘でトキワ姫といい、戦国の世に見られた両城主との間をつなぐための政略結婚でした。しばらくは平和な生活が続きましたが、ある時、領地の境界の争いから遂に二人の城主が戦うことになりました。大平方の一隊は吉良方の世田ヶ谷城近くまで攻め込みました。トキワ姫は大変この戦いに心を痛め、講和か救援を頼むほかはないと思われ、以前より可愛がっていた一羽の白鷺を使いとして、脚に手紙を結びつけて放ちました。白鷺は城の上空を二、三回飛び回ると、古巣である奥沢城に向かって飛び去りました。

ちょうど今の八中あたりまで来た時、敵兵に見つけられ、弓で射ち落とされてしまいました。羽を打ち抜かれた白鷺は、白い体を真っ赤な血で染めながらもバタバタと懸命に飛び上がろうともがきましたが、力尽きて息絶えました。

世田ヶ谷城はトキワ姫と白鷺の努力もむなしく敵の手に落ち、トキワ姫も自害しました。

しかし、その後白鷺の死んだ田圃のあたりから一本の草が生え、白い花をつけました。よく見ると白鷺が足に短冊をつけて飛んでいるようです。

これを知った人々は、白鷺の魂が花になって生まれ変わり、自分の主人のために信義に生きようとした姿だと白鷺の死を悼み、さぎ草を形見として大切に育て、またこの話を永く伝えました。

今は九品仏のさぎ園など限られた場所でしか見られなくなったさぎ草ですが、八中が創立された折、校章にデザインされ、また校歌の作詞を依頼された佐藤春夫先生もこの伝説に感銘を受けられ、「信義に生きし、白鷺の形見と咲ける野の花ぞ…」と歌い込まれたそうです。